



津上氏所藏和蘭文書三通に言及しその傳來の所以を明かにせずとある。

⑧ 中世に於ける日本と南方との關係 南方文化講座所収

⑨ 長崎市史 通交貿易篇西洋諸國部附錄 七八―九七頁大曲記・壺陽錄・井上先祖覺書・谷村友山覺書の類はこゝに言及しない。

去る八月九日から十三日まで岸俊男助手とともに平戸町に滞在し、その間主として松浦家藏の文書記録を調査したが、相當多數に上る點數のこと故、大概を一覽する程度に終つた。その内海外交通に關する文書若干を摘出して見たが、已に菅沼貞風氏の平戸貿易志をはじめ世に紹介されたものも多い。たゞそれ等は從來松浦家文書或は松浦家舊記等と稱して、その傳歴を詳かにしていないので、二、三の新史料と思われた文書とともにこの點を注記した所以である。

(昭和二五、八、二四)

### 北朝畫象石

畫象石といへば漢であるが、南北朝にも、隋唐時代にも、おなじような手法はある。これは北朝、多分北魏か東魏の石である。やはり墓中におかれたミニアチュアの城壁である。漢代には石闕というものが墓前にあつた。いまはそのミニアチュアが墓中におかれたのだとおもう。その全形はケルン東洋美術館のミニアチュア石闕によつて想像されたい。これにも本瓦葺のやねがしつらえてある。壁面に線彫の繪がある。畫象はわずかにたかくなつて、その點は武氏祠の畫象におなじであるが、ほんとにあきく、こうなればもう線描の繪である。双髻の侍童が、その主人のためにか、乗馬をひいている。いきいきとうごきのある馬をみよ。ながい尾と鞍絆は大きくうしろになびき、鞍からたれたふさが前後に大きくゆれている。胸のふさかざりはゆらぎ、前脚はいきおいよくふみだされてゐる。頸から頭にかけては、なにか裝飾のおおいようなものがあるらしい。手ずなをとつている侍童も、いくらか手をのびし、足を大またに

ひらいてゐる。そのリズムがこの繪全體を支配する。侍童はながい袖の上衣に大口袴をつけ、いしぼつてゐる。これが北魏時代の輕裝である。武人たちはみなこの服裝をしてゐた。それからおもしろいのは馬蹄のしたにみえる山々である。馬とはつりあいのとれない小さい山々である。けわしい山峯がみねをならべてゐる。左のはしに大きな樹木がある。右のはしに大きな岩ぐみがある。がけといつてよいかも知れない。實に峨たる岩ぐみである。それに二もとの樹木がある。岩に對して不つりあいに大きい。岩だかがげだかわからない。そしてその山々木々が、馬や人間のリズムに應じてうごいてゐる、いな、うごいてゐるような曲線である。それにまた應ずるやうに馬の背に鳥がとんでゐる。なに鳥であらうか。みごとにとんでゐる。そして、はるかかなたに遠山が、ながく、ながく、しかも峯はするどくよこたわつてゐるのである。色彩は、もとより、みられない。けれども、いまはなき一幅の北魏畫をほうふつせしめるものである。石灰岩、よこ約二十一センチ。鎌倉川端康成氏藏 (みづの・せいいち)